京都広告協会70周年記念事業
これからの30年 メッセージ募集

優秀賞

橋森容子 「三十年後のウェルビーイング」

『心が少しだけ重くなってきたら、京都で本を読もう』
これからの三十年は、傷つかないように生きる努力よりも、傷ついたときに自分をどのように回復させるかが、問われる時代になるだろう。
京都は千年の都だ。古い寺の境内に入ると、静けさが体の中まで染み込んでくる。
西陣織の職人たちは技を磨き、大学の図書館では若者たちが静かにページをめくっている。
京都という街は長い間、「学びによって回復する都市」として、そっとそこに在り続けてきた。
知ることは、自分の心の骨格を少しずつ強くしていく作業のようなものだ。
本を読むことは、傷の奥底に沈んでいる自分の声に、耳を澄ますことだ。
学ぶことは、暗い道を照らす、小さな灯火を手に持つということだ。
京都は、千年分の回復力に触れることができる場所なのだ。

京都は長らく「ビジネスの都市」というイメージが薄かった。
しかし世界が今、求めているのは、効率だけを追う都市ではない。
知と文化を基盤にした、回復力のある都市モデルだ。
京都はその原型を、ずっと前からに持っている。
「疲れた心を整えるために京都へ行く」という新しい都市モデル。
そこは、観光＝消費ではなく、回復＝価値創造という、新しいブランディングができる。
グローバル企業のウェルビーイング拠点として、京都は最適だ。
世界の企業が「社員の心の回復」を重視する時代。そんなとき京都は最高の研修拠点となるだろう。
京都は、知を絶やさず、未来の知へと静かにバトンを渡してきた街だ。
これからの三十年を生きるために必要なのは、無傷でいる強さではない。
傷ついた自分を立て直す、しなやかさだ。
京都には、千年もの間、継承してきた知が積み重なっている。
だからこそ、京都は新しい回復力の産業を生み出していくだろう。
観光の都市から、ウェルビーイングの都市へ。
京都は、世界の心を支えるインフラの一つになるかもしれない。